

黙示録16章16節 「ハルマゲドンの戦い」

1A メギドの山

1B メソポタミアとエジプトの狭間

2B 戦いの歴史と預言

2A 神の大いなる日の戦い

1B 獣の霊

2B 神による戦い

3B 盗人のように来られる方

3A 一つになった反抗

1B 神からの権威

2B 足かせを解こうとする者たち

3B 十字架につける権力者

4A 神との平和

1B 罪を犯した敵対者

2B キリストにある神の和解

3B 明け渡すことによる平和

本文

黙示録 16 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、15 章まで来ていました。午後礼拝で、16 章を一節ずつ学んでいきたいと思います。今朝は、16 節に注目します。「**こうして汚れた霊どもは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めた。**」

ハルマゲドンという言葉、一般の人々も知っているぐらいで、あまりにも有名です。けれども、その意味からあまりにもかけ離れて使われていることが多いですね。あまりにも有名で、元々の意味からかけ離れているものとしては、先月のバレンタインはその一つです。ローマ皇帝によって迫害を受け、殉教した聖ウエレンティヌスに由来する記念日ですが、なぜかそれが、女性が男性にチョコレートを渡す日になってしまいました。日本でチョコレートの会社が商法として使ったせいです。

同じようにハルマゲドンは、日本ではオカルトやカルトで使われています。SF についての小説、アニメ、映画でも出てきますね。昔はノストラダムスの大予言、オウム真理教の地下鉄サリン事件がありました。アメリカでは、普通に終末の様相を示している時に、ハルマゲドンが使われます。あまりにも恐ろしいこと、世界破滅の危険を感じ取る時に使います。大統領も時々、発言するぐらいです。映画「アルマゲドン」というものもありましたね。

1A メギドの山

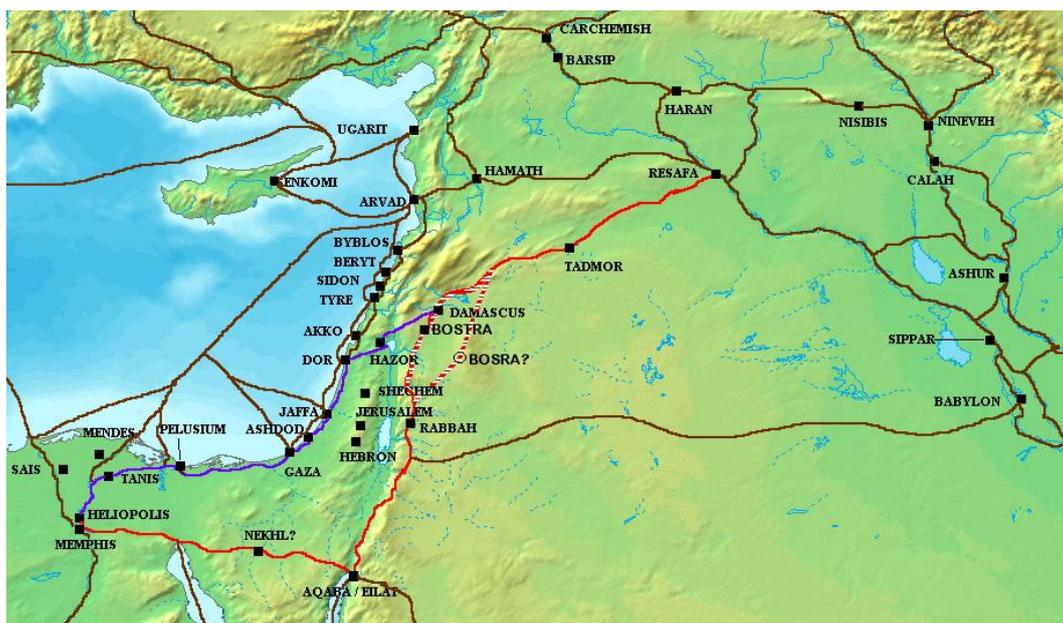
「ハルマゲドン」という言葉の意味を知れば、これらの使われ方がすべて誤りであることが、すぐに分かります。これがヘブル語であると言っていますが、「メギドの山」という意味です。「ハル」が山という意味です。これは、メギドという古代の町であり、そこ



に広がるイスラエル平野の辺りを指している言葉です。だから、オウム真理教が永田町に向かう地下鉄にサリンをしかけて、ハルマゲドンの戦いだと言っているのは、まるで的を外しています。

1B メソポタミアとエジプトの狭間

メギドがどこにあるのかを知るのが、なぜここに、世界の王たちが集まって来るのかを知るのに、とても重要になります。聖書の舞台である中東地域は、南はエジプト、北の向こうはメソポタミアという二つの文明に挟まれていました。ちょうどサンドウィッチが二つのパンの間に具を入れるように、イスラエルが南と北の文明に挟まれていたのです。そこに国をまたぐ国際幹線が走っており、一つは、ウィア・マリスと呼ばれる海沿いの道、もう一つはヨルダン川の東を走る王の道です。貿易が発達していましたが、超大国の間で覇権争いの狭間にあり、絶えずそこで戦いが起こっていました。イスラエルが、その中で主を信じて平和を求めているので、それで聖書には、戦いの中で主がおられることを証しするものが多いのです。



1 さらに、イスラエルの地図を使ってズームインしますと、イスラエルは、ちょうど日本の東北地方に似ています。真ん中に山地が南北に走っているんです。南からユダ山地があり、その北はサマリア山地です。そして北にはガリラヤの山地があります。その西には地中海沿岸の平野が広がっています。東は、ヨルダン川の流れているヨルダン渓谷があり、なんと海拔マイナスです。そこで、ご自身が、南から北、北から南に貿易をしている商人だと想像してください。エジプトから、メソポタミア地方に、海沿いの道を使って北上する時に、どこかで海沿いから内陸に入らないといけませんね。けれども、山地が阻んでいます。けれども、その山地が途切れるところがあります。それが、イズレエル平野なのです。東西に広がっている平野です。それで、ここで西から東に横断します。

このイズレエル平原の入口の一つに、メギドの町があるのです。

2B 戦いの歴史と預言

ですから、メギドとこの平原には、古来から戦いが絶えなかったのです。このメギドは、今は世界遺産に指定されて久しいですが、そこはなんと、発掘したら 26 層もの地層が発見されました。地層といっても、自然のものではなく、そこに町が建てられていて、他国の勢力が攻め取り、その町を潰して、平らにならします。そして、他の国が攻めて、それを破壊して地ならしします。そうやって層ができてきたので、26 もの国や勢力が攻めては倒れるということを繰り返していったのです。



¹ https://tomoshihi.or.jp/pilgrimage/assets_c/2024/06/20240714-1-99.html

古くは、エジプトのファラオ、トメス三世がカナンの王たちと戦いをしました(紀元前 15 世紀)。「メギドの戦い」と呼ばれています。そして、ヨシュア記には、ヨシュアたちがメギドの王を倒しています(12:21)。そして、士師の時代には、デボラとバラクが、シセラと戦いました(5:19)。そして、イスラエルの将軍エフーが、ユダの王アハズヤを倒しましたが、アハズヤはメギドで死んでいます(Ⅱ列王 9:27)。そして、ユダの王ヨシヤが、エジプトのファラオ、ネコと戦い、倒れ死んでいます(Ⅱ歴代 35:22-24)。そしてアッシリア王が、ここを占領しました(Ⅱ列王 15:29)。

そして聖書ができた後も、ここでは戦いが繰り広げられました。ユダヤ反乱が起こった時に、ローマの総督ティスがこの平野で戦っています。十字軍とサラディンとの戦いもありました。なんとチンギスハン率いるモンゴル軍が、このイズレエル平野にまで侵入したことさえあります。²ナポレオンも、ここに来ています。そして、なんと 20 世紀、第一次世界大戦の時に、オスマン・トルコ軍とイギリス軍が戦って、それもメギドの戦いと呼ばれているのです。古代のメギドの戦いから、近代のメギドの戦いまで、ずっと戦いが繰り広げられているのです。

そして今のイスラエルは、いかがでしょうか？イランを始めとして、四方から残滅を狙う敵に取り囲まれています。王たちがメギドに集結するという、ハルマゲドンの戦いは、決して夢空言、空想話ではなく、現実的な危険を帯びた、差し迫る世界大戦なのです。

2A 神の大いなる日の戦い

1B 獣の霊

ハルマゲドンの戦いは、七人の御使いが鉢をぶちまける災いで、第六の災いになります。そうすると、12 節を見てください、ユーフラテス川が涸れます。そこを、日の昇る方から来る王たちがやって来る備えとなります。

そして 13-14 節には、こうあります。「¹³ また、私は竜の口と獣の口、また偽預言者の口から、蛙のような三つの汚れた霊が出て来るのを見た。¹⁴ これらは、しるしを行う悪霊どもの霊であり、全世界の王たちのところに出て行く。全能者なる神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを召集するためである。」私たちが学んできた、獣、反キリストが全世界の王たちに呼びかけて、それで王たちがメギドのところ集結するのです。これは、神とキリストを冒瀆し、反抗する勢力の戦いなのです。神の民とされるイスラエル、また神の都とされているエルサレムに対して戦いを挑む、全世界の王たちの戦いです。

2B 神による戦い

けれども、それは「全能者なる神の大いなる日の戦い」と呼ばれています。全世界の王たちが集まって、一つになって神とキリストに対して戦うのですが、彼らはイスラエルとエルサレムを全滅さ

² https://en.wikipedia.org/wiki/Battle_of_Ain_Jalut

せるべく戦いに来るのですが、神ご自身がすべてをお見通しであり、この反抗勢力を一掃するために待っておられる、ということです。

出エジプトの奇跡を思い出してください。主は、災いをエジプトに下して、イスラエルの民がエジプトから出ていくようにされました。ところが、なんと引き返して、紅海の手前にある海辺に宿営するように命じられるのです。それで、ファラオが思い直して、イスラエルを奴隷にするため取り返すために、軍隊を引き連れてやってくるのです。イスラエル人たちは、もう終わりだ！と叫びました。だって、自分たちは、ついさっきまで奴隷だったのです。相手は、超大国エジプトの精鋭部隊です。けれども、主がこのことをすべて行われたのです。紅海を分かれさせ、その乾いたところをイスラエルの子らに渡らせ、向こう岸に着いた時に、海を戻します。そして、その中を歩いていたエジプトの戦車や馬をすべて水に沈めたのです。

同じことを主は行われます。主は、ご自身に反抗する者たちを、おびきよせて、一つになって攻めてくる者たちを一掃して、それでご自身の国、神の国を地上に打ち立てられるのです。

3B 盗人のように来られる方

このことと、私たち一人一人、信仰者とどんな関係があるのでしょうか？世の終わりに、世界で起こることが、今の私たちにどう関わるのでしょうか？主イエスは、これを教訓にして以下のことを語られます。15 節です、「—見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである—」盗人のように来る、また目を覚まして衣を着ていなさいと警告しています。主は、弟子たちにもオリーブ山で、ご自身が盗人のように来るから、いつ来るか分からないから、目を覚まして用意していなさいと、何度となく語っておられました。ハルマゲドンの戦いが、キリストにある神の救いを教えています。

3A 一つになった反抗

その鍵となるみことばが、私たちが交読文で読んだ、詩篇第二篇です。1 節から 6 節までを、また読んでみましょう。

- 1 なぜ 国々は騒ぎ立ち
もろもろの国民は空しいことを企むのか。
- 2 なぜ 地の王たちは立ち構え
君主たちは相ともに集まるのか。
主と 主に油注がれた者に対して。
- 3 「さあ 彼らのかせを打ち碎き
彼らの綱を解き捨てよう。」
- 4 天の御座に着いておられる方は笑い

主はその者どもを嘲られる。
5 そのとき主は 怒りをもって彼らに告げ
激しく怒って 彼らを恐れおののかせる。
6 「わたしが わたしの王を立てたのだ。
わたしの聖なる山 シオンに。」³

1B 神からの権威

ハルマゲドンの戦いは、2節にある「**相ともに集まる**」ことが、最も大きな特徴です。主と油注がれた者、すなわちキリストに対しては、相ともに集まり、戦います。それまでは、互いに戦い、争い合っていたのにも関わらず、ことキリストのことになれば、心を一つにすることができ、それで共に、神とキリストに反抗するのです。敵の敵は味方、と言われますね。キリストが自分にとっても敵、相手の敵にとっても敵であれば、その敵は自分の味方なのです。

2B 足かせを解こうとする者たち

何がそうさせるのか？王たちにとっては、キリストが王の王、主の主であることがどうにも我慢ならないのです。王たちは、それぞれが神から権威が与えられています。聖書には、神こそが王を立て、王を倒す主権者であることが教えられています。すべて権威や権力のある者は、上から与えられているのでなければ、与えられていないのです。総督ピラトがイエスに対して、「**私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。**」と言ったら、イエスは、「**上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。**」と答えられました(ヨハネ 19:10-11)。

けれども、王たちにとって、自分の上に権威があるというのが、足枷になっています。詩篇 2 篇 3 節をもう一度、見てください。「**さあ 彼らのかせを打ち砕き 彼らの綱を解き捨てよう。**」自分の上に権威があることが、枷になっており、綱になっているのです。それを解き捨てたい、自分の好きなようにしたい、自分こそが神のように権威あるものだとしたいのです。ちょうど、エジプトのファラオのように、主なる神の言うことなど聞きたくない心で頑なにしているのです。

これは、地上の王だけでなく、すべての人が持っている枷であり、綱ではないでしょうか？私たち人間は、神のかたちに造られました。神により頼み、神に従うために造られました。けれども、神に似た者なので、神に従いながら、他の被造物を支配する、あるいは管理する力が与えられています。それぞれに、自分が自分に自由にできる領域が任せられています。けれども、それは、神により頼み、従い、導かれていく中で、初めてその自由が実のあるものとして行使できるのです。

³ 新改訳 2017 聖書 (Ps 2:1-6). (n.d.).

ところが、人々は、自分は束縛されたくない、自分でやりたいことをやりたいとして生きています。それで自分は自由になれるのか？という、全くそうではありません。ちょうど、自分は重量の法則から自由になりますという、ビルの屋上から飛んでも、落ちていって、地面に打たれるだけです。人は、自分の欲するままに生きれば、その欲望によって滅んでいってしまうのです。

ローマ人への手紙で、そこにいるキリスト者たちに、パウロはこう語りました。「6:20-21 あなたがたは、罪の奴隷であったとき、義については自由にふるまっていました。21 ではそのころ、あなたがたはどんな実を得ましたか。今では恥ずかしく思っているものです。それらの行き着くところは死です。」ローマ社会では、自分の欲望のままに生きることが普通とされていました。けれども、キリスト者となって今、彼らは、それを恥ずかしく思っています。何の良い実も結ばれませんでした。そして、もしその悪い行いをしていったら、死をもたらすことをよく知っていました。

3B 十字架につける権力者

私たちがまことの自由を得るのは、むしろ、くびきが自分につけられる時です。それは、自分を造られた神からのくびき、そしてキリストのくびきです。イエスは、疲れた者、重荷を持っている者は、わたしのところに来なさい、と言われました。そして、わたしのくびきは軽いから、わたしから学びなさいと言われました。この方のくびきは、むしろ休みを与えます。魂に安らぎを与えます。

主がなぜ、私たちに安らぎを与えることができるのか？それは、この方が私たちの重荷を負ってくださるからです。その重荷の最大のものは、罪です。自分のからだある罪の性質です。神から離れた自分で生きようとする意欲です。この罪、反抗のために主は、十字架につけられました。

使徒の働きで、誕生したばかりの教会で、熱心な祈りが献げられました。彼らがキリストを宣べ伝えるのを、ユダヤ当局がやめさせようとしたからです。それで彼らが熱心に祈った時に、引用したのが、詩篇第二篇です。「使徒 4:25-28 あなたは聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ、異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの国民はむなしいことを企むのか。26 地の王たちは立ち構え、君主たちは相ともに集まるのか、主と、主に油注がれた者に対して。』27 事実、ヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人たちやイスラエルの民とともに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、28 あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。」

この預言は、キリストが再び来られる時に実現するのですが、霊的には、すでに同じことを世の権力者が行いました。ヘロデとピラトは、当時、敵対していました。ヘロデは、ローマ皇帝から任されて、ユダヤ人たちを治める国主でした。ピラトは、ユダヤ属州を支配していた総督でした。政治的に、しばしば対立していました。ところが、イエスが、ユダヤ人たちによって訴えられていることを通して、仲良くなったのです。「ルカ 23:12 この日、ヘロデとピラトは親しくなった。それまでは互

いに敵対していたのである。」

先ほど話しましたように、世の権力者たちは、キリストに対して反抗することについては、相集まり、一つとなることができません。私たち人間はすべて、同じように、神とキリストに対して、その権威に服することを拒み、自分が神であるかのように自由にふるまいたいと願っていることについては、一つになることができます。

4A 神との平和

1B 罪を犯した敵対者

世界は、二つの種類の人々に別れます。神とキリストを王として従う人々、そして齒向かう人々です。どんな違いがあり、互いに争っていても、神とキリストに対しては、すべての人々を平等にします。信じる者たちも一つにしますが、信じないで拒む人たちも一つにします。なぜなら、神に敵対することについては、一致しているからです。パウロは宣言しました、「それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。(ロマ 3:20b)」

2B キリストにある神の和解

私たちは、王たちのように武器をもって神に反抗しなくとも、自分の生活の中で、心の中で、自分の上におられる方に反抗します。神はいないと心で言っています。しかし、そのような無知、また反抗に対して、主は怒って私たちを滅ぼすのではなく、むしろ、その御怒りをご自身の御子、キリストに注がれました。それが十字架です。イエスが、「神よ、神よ、なぜ、わたしをお見捨てになられたのですか」と言いましたが、罪を背負った方は、父なる神からその時に、引き離されたからです。

神は、なんと私たちに滅ぼそうとされません。むしろ救おうとされています。それで、ご自身のほうで、一方的に和解してくださったのです。キリストにあって和解してくださいました。「Ⅱコリ 5:19 すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました。」

同志社大学の創始者、新島謙は、学生たちが授業をボイコットするという事態に対して、朝の礼拝の後に、なんと右手に持っていた杖で、左手の甲を力いっぱい叩き始めました。それは、校長自らが、彼らが校則違反をした責任を負ったのです。それ以来、彼らは自分たちのした過ちの重みを知り、校則違反をしなくなりました。このように、キリストの十字架は、神が自らに、私たちの負債を負わせた、和解のメッセージなのです。そして私たちは、自分の反抗をやめ、罪から離れ、キリストに従わせるようになります。

3B 明け渡すことによる平和

そして、私たちは、主に明け渡します。自分の身を明け渡します。もはや、自分が神に反抗して

もどうしようもない、疲れ果ててしまうだけである。自分自身を傷つけ、自分を滅ぼしていくだけであることを知り、降参するのは、主に、自分を明け渡します。そうすれば、私たちに平和が来ます。神との平和です。「ロマ 5:1 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」どうか、主の平和を受け入れましょう。主は、すでに敵意をご自身のキリストに負わせたのです。あとは、和解の御手だけが、伸ばされています。どうか、和解を受け入れてください。